平成令和三年度

滝川第二中学校　入学考査　問題

A1日程

国語

（五十分・百五十点）

注意事項

1　問題は1ページから14ページまであります。
2　解答は、すべて解答用紙に記入しなさい。
3　「開始」の合図があるまで問題用紙を開いてはいけません。
4　考査番号と氏名を、解答用紙と問題冊子の表紙に正しく記入しなさい。
5　解答用紙の※印の欄には記入してはいけません。
6　計算機能付き腕時計・携帯電話の持ち込みは禁止です。
7　「終了」の合図で鉛筆を置き、監督の先生の指示に従いなさい。

考査番号	氏　　名

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（指示された字数には、句読点その他の符号もそれぞれ一字としてふくみます。）

世間一般における教育のやり方を見てみると――特にいまの中等教育が、その弊害が激しいようだが――単に知識を授けるということだけに、重点を置きすぎていると思う。言葉を換えれば、道徳を育む方向性が欠けている。たしかに欠乏しているのだ。

一方で学生の気風を見ると、昔の青年の気風と違って、いまひとつ勇気と努力、そして自覚が欠けている。もちろんこのようにいって、自分のような老人が驕り高ぶった自慢を聞かせたいわけではない。何しろ今の教育は学科の科目が多い。あれもこれもといった有様で、その数多い科目の修得ばかりにおわれ、時間が足りないといった風情なのだ。このためよそ見をするヒマもなく、人格や常識を身につける努力などできないのは自然の流れだろう。これは返す返すも残念なことだ。現に社会に出ている人はともかく、これから社会に出て大いに努力し、国家のために尽くそうと思われる方々は、①こうした事情によくよく注意してもらいたい。

ところで、自分にもっとも関係の深い実業界での教育について見てみると、昔は実業教育と名乗れるようなものは存在していなかった。明治維新の後でも、明治十四、五（一八八一～八二）年頃までは、この方向で少しの進展もなかったのだ。商業学校のようなものも、その発達はたかだかこの二十年の間のことなのだ。

だいたい文明の進歩というのは、政治、経済、軍事、商工業、学芸などがAことごとく進歩して、初めて真の姿を見ることができる。そのなかのいずれか一つが欠けても、完全な発達、文明の進歩とはいえaないのだ。ところが日本では、その文明の大きな要素であるはずの商工業が、久しくBなおざりにされて顧みられなかった。

一方で欧州の列強国を見ると、他の方面ももちろん進歩しているが、なかでもとりわけ進んでいるのが実業、つまり商工業なのだ。わが国においても近頃は実業教育に対する世間の関心が高まり、進歩発展をしてきた。しかし惜しいことに、その教育方法はといえば前に述べたように、急かされるままに、急ぐがままに、理論や知識一辺倒になりがちになっている。規律であるとか、人格であるとか、道徳や正義といったことはまったく顧みられbないのだ。大勢の流れのなかでは、これは仕方がcないことだといえるかもしれないが、とても嘆かわしいことだ。

実業界でやっていこうという者は、②こうしたもろもろの性質

を十分に備えたうえで、もう一つ尊重しなければならd ない重点が残っている。それは自由――自分を頼りにするということだ。実業の世界では、たとえば軍事における事務のように、いちいち上官の命令を待っているようではとにかくチャンスを逃しやすい。だから、何事も命令を受けてやるのでは、成長がちょっとむずかしいのだ。

ただしその結果として、知識ばかりへと傾いていって、自分の利益ばかり追うようになってしまっては、孟子のいう、

「上に立つ人間と、下の人間がともに利益追求に走ってしまえば、国は危うくなる」

という状態に陥ってしまいかねない。この点がとても気がかりなので、何とかこのような事態にならないよう、わたしにとっては身近な実務教育においても、知育と徳育とを一緒に行っていきたいと及ばずながら長年努力している次第である。

経済の世界には「需要」と「供給」の原則がある。同じように、実社会に身を投じて活動しようとする人間にも、この原則が適用されるのではe ないだろうか。

いうまでもなく、社会で行われているビジネスの規模には一定の限界があって、使えるだけの人材を雇い入れると、それ以上はいらなくなってしまう。ところが、人材の方は年々たくさんの学校で養成が行われている。このため、いまだ成長の途上にあるわが実業界は、それらの人々を十分満足させるべく使い切ることができないのだ。

特に、今日の時代は高度な教育を受けた人物の【　A　】が多すぎる傾向が見受けられる。学生は一般的に、高度な教育を受けて、立派な事業に従事したいとの希望を持っている。だから、たちまちそこに人が集まり、【　B　】過剰を生まずにはいられなくなる。

学生がこのような希望を抱くのは、個人としてもちろん祝福すべき心がけだろう。しかし③これを一般社会や、国家からの立場で見たらどうだろう。わたしには必ずしも喜ぶべき現象としてとらえられないように思われる。要するに、社会はどこも同じというわけではない。だから、④社会が必要とする人材にはさまざまなタイプが必要なのだ。

高い地位という観点からいえば、会社には社長になる人物がいるし、低い地位でいえば雑用係から運転手になる人まで必要になる。人を使う側は数が少なくなる一方で、使われる側には無限の【　C　】がある。これを踏まえて、人に使われる側の人物にな

ろうと学生が志すならば、【　D　】も多いし、今日の社会であっても人材が余るということはないであろうと考える。

ところが今日の学生のほとんどは、その少数しか必要とされない、人を使う側の人物になりたいと志している。つまり学問をしてきて、高度な理屈も知っているので、人の下で使われるなんて馬鹿らしいと思うようになってしまったのだ。

同時に、教育の方針もやや意義を取り違えてしまったところがある。むやみに詰め込む知識教育でよしとしているから、似たりよったりの人材ばかり生まれるようになったのだ。しかも精神を磨くことをなおざりにした結果、人に頭を下げることを学ぶ機会がない、という大きな問題が生じてしまった。つまり、いたずらに気位ばかり高くなってしまったのだ。このようであれば、⑤人材が余ってしまう現象もむしろ当然のことではないだろうか。

いまさら⑥寺子屋時代の教育を例にひいて論ずるわけではないが、人材育成の点は不完全ながらも昔の方がうまくいっていた。今に比較すれば教育の方法などはきわめて簡単なもので、教科書もレベルが高いもので四書五経や八大家文くらいがせいぜいだった。ところがそれによって育成された人材は、けっして似たりよったりではなかったのだ。それはもちろん、教育の方針がまったく異なっていたからだ。学生はおのおの得意とする所に向かって進むので、十人十色の人材に育っていった。

たとえば、秀才はどんどん上達してレベルの高い仕事に向かったが、頭のよくない者は無理な望みを抱かず一般の仕事に携わるといった気風があった。だから人材を使うのに困るという心配はなかったのだ。

これに対して今日では、教育の方法は素晴らしいのだが、その精神をはきちがえてしまった。そのため学生は自分の才能の有無や、適不適もわきまえずに、

「⑦あいつも俺も、同じ人間じゃないか。あいつと同じ教育を受けた以上、あいつがやれることくらい俺にもできるさ」

という自負心を持って、下積みのような仕事をあえてしようと考える者が少なくなってしまった。このような気概を持つことは、昔の教育が百人のなかから一人の秀才を出そうとしたのに対し、今日は九十九人の平均的人材をつくる教育法の、長所といえなくもない。しかしその精神を誤ってしまったので、ついに現在のように並以上の人材があり余ってしまうという結果をもたらしたのだ。

しかし同じ教育方針をとっている欧米の先進国の状況を見て

みると、教育によってこのような弊害を生ずることが少ないように思われるのだ。とくにイギリスはわが日本の教育の現状とはまったく違い、常識が十分に育つようにし、人格のある人物をつくることに注意をはらっているように見える。

もちろんこれは、教育について詳しいとはいえないわたしのような人間が簡単に口出しできる問題ではないのだが、大枠から見ていくと、今日のような結果を生んでしまう⑧教育はあまり完全なものではないと思っている。

（渋沢栄一　守屋淳＝訳『現代語訳　論語と算盤』より。なお、作問の都合上、一部改変してあります。）

問一　〰〰線部A「ことごとく」B「なおざり」のここでの意味として最も適当なものを、それぞれ次の**ア**～**エ**から選び、記号で答えなさい。

A　**ア**　いつものごとく　　**イ**　有無を言わさず
　　ウ　力強く　　**エ**　残らず

B　**ア**　余り注意を向けず、いい加減に
　　イ　受け入れることを防ぐ
　　ウ　別のものの代わりに置かれる
　　エ　無責任に、関係をすべて断って

問二　‖線部a～eの「ない」を性質の違う二つのグループに分けるとすれば、どの分け方が最も適当ですか。次の**ア**～**エ**から選び、記号で答えなさい。

ア　（a・b・d）と（c・e）
イ　（a・c）と（b・d・e）
ウ　（a・d・e）と（b・c）
エ　（a・e）と（b・c・d）

問三　――線部①「こうした事情」とはどのような事情ですか。次の文の【　1　】～【　4　】に入る表現を、【　1　】は二字で、【　2　】は八字で、【　3　】は七字で、【　4　】は十九字で、それぞれ本文中から書きぬきなさい。

今の学生は【　1　】しなければならない【　2　】ため、【　3　】せいで、【　4　】状況にあるということ。

問四　――線部②「こうしたもろもろの性質」の内容を本文中から二十五字以上三十字以内で探し、最初と最後の五字を書きぬきなさい。

問五　空欄【　A　】～【　D　】には「需要」か「供給」のいずれが入りますか。

問六　――線部③「これ」の指示内容を次のように説明しました。次の文の【　1　】【　2　】に入る表現を、本文中からそれぞれ十一字で書きぬきなさい。

【　1　】が【　2　】と思うこと。

問七　――線部④「社会が必要とする人材にはさまざまなタイプが必要」を本文中の言葉を用いて次のように言い換えました。【　　】にあてはまる言葉を、本文中から七字で書きぬきなさい。

社会には【　　】が必要

問八　――線部⑤「人材が余ってしまう現象もむしろ当然」なのはなぜですか。次の文の【　1　】～【　4　】に入る表現を、【　1　】は十二字で、【　2　】は五字で、【　3　】は三字で、【　4　】は五字で、それぞれ本文中から書きぬきなさい。

【　1　】を重視し、【　2　】ことを軽視した結果生み出された【　3　】ばかりが高い学生が【　4　】の人物になりたいと志すのは当然の結果だから。

問九　――線部⑥「寺子屋時代の教育」の内容を端的（たんてき）に表した部分を本文中から二十字以内で書きぬきなさい。

問十　――線部⑦「あいつも俺も、同じ人間じゃないか。あいつと同じ教育を受けた以上、あいつがやれることくらい俺にもできるさ」とありますが、どのような意味で使われていますか。最も適当なものを、次の**ア**～**オ**から選び、記号で答えなさい。

ア　今日の教育の弊害によって失われた精神。
イ　今日の教育の弊害により誕生した考え方。
ウ　これからの教育の目指すべき方向性。
エ　昔の教育から見習うべき態度。
オ　昔の教育に欠けていた気概。

問十一　――線部⑧「教育はあまり完全なものではない」とありますが、今日の教育を完全なものに近づけるにはどのようなことが必要ですか。本文中から二十六字で探し、最初と最後の五字を書きぬきなさい。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（指示された字数には、句読点その他の符号もそれぞれ一字としてふくみます。）

それぞれ区間を走り終えて競技場まで戻ると、みんなゆったりと休憩をした。この地域に一つしかないこの競技場は、敷地内に公園もサブグラウンドもある大きなもので、至る所に芝生が植えられている。スポーツをするのにも休息を取るのにも、最適な場所だ。僕は芝の上で、一人でストレッチをした。久しぶりに出た九分台に、心も穏やかだった。

「おい、お前、そろそろ本気出せよ」

足の筋を伸ばしていると、大田が隣にどかっと座ってきた。

「え？」

大田がやってきたことにびっくりして、僕の声はうわずった。

「え？　って、もうあと十日だろ？　マジでやれよ」

「①マジでって……？」

「マジで走れってこと。お前、もっともっと速かったじゃん」

そう言うと、大田は僕のスポーツ飲料を勝手に開けて飲んだ。

「もっとって言われても……」

今日はいい記録を出せたし、自分自身のベストに近い走りだっ

た。
「お前こんなもんじゃねえだろ。俺、陸上わかんねえからタイムのことは知らねえけど、小学校二年からお前は俺の何倍も速かったはずだ」
「さ、さあ……」
僕は首をかしげた。小学校二年で走った記憶などない。そもそも僕が走って記録を出したのは六年の駅伝だけで、あとは細々とした小学生活を送っていた。
「さあとかとぼけんなよ。あのころ市野小で、俺といい勝負するのお前だけだったじゃん」
大田は話の通じない僕にいらついていたが、僕もちんぷんかんぷんだった。大田となんて勝負したことがない。小学生の時から僕は大田が怖かった。
「あーもう、本当、お前、記憶力ゼロだな。二年生の時の全校レクリエーションで鬼ごっこしたことあっただろ？」
【　A　】僕に、大田は座りなおし胡坐をかいた。
「まあ、なんか、そういうのはあったような気もする」
「そうそれ。その時俺、鬼だったんだ。俺は超最強の鬼で全員捕まえたのに、お前だけ捕まえられなかった。お前には全然追いつけなかったもんな」
僕たちの通っていた小学校は小さかったから、よく全校や学年で遊ぶレクリエーションというのがあった。もちろん僕にとってそれは楽しいものではなかった。ドッジボールをしようとかくれんぼうをしようと、②僕には敵がたくさんいて、いつだって必死で逃げるしかなかった。
「俺が全速ダッシュで追いかけてるのに、お前どんどん引き離してさ。手が届かなかったんだよなあ。うん、お前の走りっぷりってすごかった」
大田は昔を懐かしむように言った。
「そ、それは本気で大田君が怖かったからだよ」
僕は見当違いに褒められるのが申し訳なくて、正直に告白した。その時の記憶はないけど、小学二年の僕にとって、追いかけてくる大田は本物の鬼以上に怖かったはずだ。
「怖い？」
「ああ、えっと、まあ、その、なんか怖いかな」
「怖いって、俺、お前に何もしたことねえじゃん」
大田は堂々と言いはなった。確かに僕は大田に何もされたことがない。だけど、それは相手にするのが恥ずかしいほど僕が弱い

からだ。
「そうだけど……でも、それは……」
「でも、何だよ」
「何って……」
「はっきり言えよな」
大田の視線が僕のほうへ動く。大田の目はいつも尖っている。その鋭さに、僕は声が出なくなってしまう。
「③本当、お前って俺とまともに話そうとしねえな」
「そ、そんな……」
「まあ、お前にとっちゃ俺なんか相手になんねえだろうし、どうせ俺はお前と勝負するような場にすらいねえのかもしれねえけど」
「いや……」
「でも、俺は小学二年の時からお前のことすげえライバルが現れたと思ってたんだぜ。俺、幼稚園から、鬼ごっこでもドッジでも負け知らずだったのに、追いつけないやつがいるなんてさ」
大田はそう言うと、また僕のスポーツ飲料を飲んだ。
大田の言っていることがわかるのには、ずいぶん時間がかかった。大田がそんなことを思っていたなんて、④想像できるわけがなかった。今横にいる大田に、返したい言葉はいくつかあった。

でも、僕の中のどの思いも言葉には変換できなかった。
「とにかく俺ごときに簡単に追いつかれそうなとこにいるなよな」
大田はそう言うと、よいしょと立ち上がった。※桝井が集合だと言っている。
「うぜえ、早く帰らせろよ」
大田は怒鳴りながら、みんなのほうへ向かっていった。

1区は最初からハイペースで、競技場を出たあたりで、早くも何人かが集団を抜け出した。こんなに早く勝負をかけてくるなんて。一瞬焦ったが、【　B　】暇はない。少しでもひるんだら、そこで負けてしまう。六位以内に絶対に入らなくてはいけないのだ。
競技場を出ると川沿いの道が続く。川のすぐそばにそびえる山の木々が、音を澄ましてくれる。静かに流れる川の音は、心地いい。大丈夫だ。僕は穏やかに響く川音に合わせるように足を進ませた。
優勝候補の加瀬南中学の選手が飛ばし、それに何人かがついていく。僕はトップを走る加瀬南中の背中だけを見た。あの背中

に追いつこう。昔、大田が僕を追いかけたみたいにどこまでも追いかけよう。単調な道に気持ちを途切れさせないように、僕は先頭を追いかけた。

川沿いの道を抜け広い道に出ると、沿道にはたくさんの観客がいた。「ファイト」「がんばれ」という声がひっきりなしに聞こえてくる。市野中学の生徒や保護者もいて、僕に対する声援もあった。初めて駅伝を走った時、僕は心底驚いた。この僕が、みんなから励ましやねぎらいの言葉を送られているのだ。もし僕が駅伝を走っていなかったら、陸上部に入っていなかったら、誰かに応援されることなどなかったはずだ。がんばれという言葉が、僕にはよく響く。ありきたりの言葉がありがたいということを、僕はここにいる誰よりも知っている。桝井が僕をここに連れてきてくれた。いじめられっ子だった僕を、こんな場に導いてくれた。絶対に遅れるな。絶対に先頭から離れるな。僕はみんなの声をかみしめるように、さらに力をこめた。

残り５００メートル。みんながスパートをかけはじめ、僕もピッチを上げた。遅れるわけにはいかない。僕はずっと言われるがままに走ってきた。楽しいのかなんて感じる余裕もなく、義務のように走ってきた。だけど、今、僕を走らせているのは、義務感だけじゃない。「勝ちたくない？」駅伝練習が始まる前、桝井は僕に訊いた。勝つ、負けるということは、よくわからない。でも、この襷を大田に繋ぎたいと、誰よりも早く大田に渡したいと思っている。後ろに迫ってくる足音を振り切るように、僕は更に加速した。

「設楽、ここまで！」

最後の角を曲がると、大田の野太い声が聞こえてきた。大田はずいぶん先から僕の走りを真っ直ぐに見ている。まぶしいのだろうか、大田の目は細くしかめられている。すごみのある大田の視線と声に、プレッシャーは極度に達した。小学校駅伝の時とは比べ物にならない重いプレッシャーだ。けれど、あの時みたいにつらくはない。この重さが心地いい。僕は残っていた力の全てをこめて、足を前へと進ませた。もう何も身体に残さなくていいのだ。全てを前に進ませる力に変えればいいのだ。僕は死に物ぐるいで走った。大田が怖いからじゃない。大田のライバルでいたいからだ。大田と同じ場に立てるやつでいたいからだ。

残り５メートル。僕は倒れこむように大田に手を伸ばした。

「お疲れ、設楽！」

大田は奪うように襷を受け取った。

「頼む」

そう言おうとしたけど、もう声を発する力すら残っていなかった。それでも大田は、

「任せとけ」

と、軽く右手を上げて僕に応えて、駆けていった。

（瀬尾まいこ『あと少し、もう少し』より。なお、作問の都合上、一部改変してあります。）

注　桝井…陸上部部長。中学生活最後の駅伝大会に向けてメンバーを募って練習を始めた。

問一　――線部①「マジでって……？」からは、「僕」のどのような心情がうかがえますか。次の文に合うように説明しなさい。ただし、【　A　】は本文中から八字で書きぬき、【　B　】は自分で考えて漢字二字で答えなさい。

僕は【　A　】と【　B　】しているため、大田の言っている意味が分からなかったから。

問二　本文中の【　A　】【　B　】にあてはまる言葉で、最も適当なものを、次の**ア**～**オ**から選び、記号で答えなさい。

A　**ア**　及びもつかない　**イ**　所在がない　**ウ**　突拍子もない
　　エ　的を射ない　**オ**　満更でもない

B　**ア**　息巻いている　**イ**　臆している　**ウ**　逆上している
　　エ　悲嘆している　**オ**　やきもきしている

問三　――線部②「僕には敵がたくさんいて、いつだって必死で逃げるしかなかった」とありますがそれはなぜですか。次の空欄にあうように本文中から十字で書きぬきなさい。

僕は【　　】から。

問四　――線部③「本当、お前って俺とまともに話そうとしねえな」とありますがそれはなぜですか。最も適当なものを、次の**ア**～**エ**から選び、記号で答えなさい。

ア　僕にとって大田とでは長距離走の実力が違いすぎて勝負しては大田を傷つけることになってしまうと思っているから。

イ　僕は素行の悪い大田に関わると何をされるかわからないと思い、大田と関わってはいけないと思っているから。

ウ　僕は大田に怯えており、大田と話をしなくてはならなくなると、緊張のあまり上手にしゃべることができなくなってしまうから。

エ　僕は大田に小学校の時のことを持ち出されるのがいやで、大田を避けていたから。

問五　――線部④「想像できるわけがなかった」とありますが、それはどういうことですか。次の空欄にあうように、本文中の言葉を用いて三十五字以内で考えて答えなさい。

大田が【　　】想像できるわけがないということ。

問六　「大田」の人物像について述べたものとして最も適当なものを、次の**ア**～**エ**から選び、記号で答えなさい。

ア　人の飲み物を勝手に飲んだりするガサツな部分はあるが、「僕」をさりげなく励ましたりと、気配りのできる人物。

イ　長距離走で「僕」に勝てないことを素直に認めることのできない、負けん気の強い人物。

ウ　強気な性格で周囲からは恐れられているが、それは自信のなさの表れで、本当の自分を表に出せない不器用な人物。

エ　物事を深く考えることが苦手で、自分の言いたいことを素直に発言してしまう無邪気な人物。

問七　次の会話文は滝川第二中学校の授業風景の一場面です。会話文を読み、【　①　】～【　④　】にあてはまる言葉を、【　①　】には十一字、【　②　】には四字、【　③　】には二字で本文中から書きぬき、【　④　】には四字熟語を自分で考えて答えなさい。

先生　「僕」は大田との関わりを通じて大きく成長してきているよね。

生徒Ａ　「僕」を大きく変えたのは【　①　】という強い思いだろうね。わかる気がする。

先生　そうだね。「僕」の成長を感じる部分はどこだろう？

生徒B　私は「僕」がプレッシャーを【　②　】と言っているところに成長を感じます。

生徒A　【　③　】だと思って走るのはつらすぎるものね。つらくないのはやっぱり【　①　】という目標があるからじゃないかな。

先生　最後のシーンはどう思う？声を発することもできなかったのにどうして大田は「僕」の言いたかったことがわかったのかな？

生徒B　言葉を使わなくても、お互いの心が通じ合ったんだと思います。まさに【　④　】です。

先生　すばらしい。そのとおり！

問八　この文章の特色についての説明として、最も適当なものを次の**ア**～**エ**から選び、記号で答えなさい。

ア　競技のシーンでは、短い文を積み重ねるように書くことで臨場感を出し、読者をひきつける工夫がなされている。

イ　「僕」と「大田」以外の「桝井」を時折登場させることによって「僕」の心情変化の転機を作り出している。

ウ　作者は「僕」と「大田」の心情をそれぞれの立場から描くことにより、客観的に二人を表現している。

エ　登場人物の内面描写を少なくし、会話文を多用することで、物語世界と読者の程よい距離感を出している。

問九　あなたが、学校行事で頑張ったことは何ですか。五十字以内で書きなさい。ただし、文には主語を書き入れ、それぞれの文節の間の関係に注意して書きなさい。（次に練習用のマスがあるので、使いなさい。）

（練習用マス）

三　次の問いに答えなさい。

問一　次の⑴～⑸の――線がついた言葉を、慣用句で置き換えるとすれば、どのような慣用句が最適ですか。置き換える慣用句として最も適当なものを、後の**ア**～**ク**からそれぞれ選び、記号で答えなさい。また選んだ慣用句の〔　　〕に当てはまる適当な漢字も答えなさい。熟語が入るものもあります。

⑴　これは、私には解決できない問題だ。

⑵　遠慮（えんりょ）する必要のない友達と語り合うことは、本当に楽しい。

⑶　会議で彼女の提案に反対した者はいなかった。

⑷　演技を終えると、その選手は満足しきった表情で観客に手を振った。

⑸　お互い打ち解けた話し合いのおかげで問題は解決した。

ア　〔　　〕がきかない　　**イ**　異を〔　　〕えた

ウ　〔　　〕にあまる　　**エ**　〔　　〕がおけない

オ　〔　　〕の笑み　　**カ**　〔　　〕を許せない

キ　〔　　〕の喜び　　**ク**　ひざを〔　　〕えた

問二　次の⑴～⑶の四字熟語の〔　　〕にはそれぞれ共通する漢字一字が入ります。その漢字を答えなさい。

⑴　〔　　〕義名分　油断〔　　〕敵　気宇壮（きうそう）〔　　〕

⑵　〔　　〕耳（じ）東風　牛飲〔　　〕食　南船北〔　　〕

⑶　〔　　〕職（そく）故実　前途〔　　〕望　天地万〔　　〕

四　次の⑴～⑷の百人一首の空欄にはそれぞれ四季が一つずつ入ります。その季節名を漢字一字で答えなさい。

⑴　君がため〔　　〕の野に出でて若菜摘（つ）む
　　我（わ）が衣手（ころもで）に雪はふりつつ

⑵　吹（ふ）くからに〔　　〕の草木のしをるれば
　　むべ山風をあらしといふらむ

⑶　山里は〔　　〕ぞ寂（さび）しさまさりける
　　人目も草もかれぬと思へば

⑷　風そよぐならの小川の夕暮れは
　　みそぎぞ〔　　〕のしるしなりける

五　次の――線部の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して書きなさい。

(1) これからも精進します。
(2) 一般の人にも門戸を開く。
(3) 自伝を著す。
(4) 目の前には、大海原が開けている。
(5) 途中の報告は割愛します。
(6) 約束をホゴにする。
(7) 塩で味をトトノえる。
(8) ドキョウ試しのバンジージャンプ。
(9) 震災(しんさい)からフッコウする。
(10) 滝二の優勝はカタい。